

職員の指導体制と実習プログラムとの関係

－ 実習日誌におけるコメント指導に関する質的分析から －

東洋英和女学院大学 坪内千明 (2340)

[キーワード] コメント指導、指導職員の役割認識、スーパービジョン

1. 研究目的

実習教育の特徴の1つは、ソーシャルワーク固有のパースペクティブを臨床の体験をとおして獲得することにある。その場の誰にどのような角度から着目し、どのように支援に反映させるか、その場に依存した学びによって、学生ははじめてソーシャルワーク固有の専門性に触れる。そして、行為の理論や知識は、そうしたモニタリングの力に裏付けされて実践の文脈の中に埋め込まれており、あらかじめ取りだして言語化して教えることは難しい。実践現場で学ぶことの意味がそこにある。学生は、モニタリングの力を身につけながら、学内で学んだ価値、知識、技術を実践の中に見出し統合していく。

そこで重要な鍵となるのが、実習プログラムである。実習プログラムは、学生の体験による学習に関連性をもたせ、学びのプロセスを形作るものである。しかし、一方で、実習プログラムは、あくまでも職員の日常業務に基づくものであり、その時々状況に委ねられる側面もっている。また、「医師」や「看護師」「教師」などの同様に臨床をもつ人材養成に比べ、支援内容の複雑さや実習時間の制約から実地体験の範囲が限られ、特に相談機関においては「見る」「聴く」体験から学びを深めることが求められる。実習による体験からソーシャルワーク固有の専門性を見出すことは、学生にとって容易なことではない。

こうした社会福祉士実習の学びにおいて、重要な役割を果たすのは指導職員であろう。

筆者はこれまで、学生の実習日誌（社会福祉士受験資格取得の規定実習終了後の相談機関での10～12日の任意実習）の記述に関して、学生の記述に着目し、質的分析による研究を行ってきた（2010a、2010b）。さらに、指導職員のコメント指導に着目した分析により、組織における指導体制、すなわち、継続的な関わりによる指導と、半日から1日の短期間を持ち回る指導の違いが、実習プログラムの管理に大きく影響し、指導の質や方法、内容に異なる様相が見られることを明らかにした（2012）。

本研究報告では、2012年の分析結果を提示することによって、社会福祉士新カリキュラムにおける実習プログラムのあり方の方向性を探り、今後の課題と展望について検討したい。

2. 研究の視点および方法

本研究では、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下「GTA」とする）により分析を行った。データに密着して独自の理論を生成し、概念と諸概念を比較によって関係づけ、概念のまとまりから産出したカテゴリーをもとに、それらの関係から一つのコア・カテゴリーを選定して、それを中心に一連の現象を説明する質的研究法である（後藤・大出・水野訳 1996；木下 1999；木下 2003；木下 2007）。

なお、本研究では、データを切片化せず、データのまとまりから現象のつながりや流れを解釈することを重視した修正版M-GTA（Modified Grounded Theory Approach）を採用した。その理由は、第一に、学生との相互作用や役割を反映した実習指導職員の記述に焦点をあてた分析が必要であること、第二に、本研究が、実習指導職員の実習日誌へのコメント等の記述という限られたデータに適した分析手法を必要としたこと、第三に、実習がプロセス的特性をもっていること、以上3点による。

3. 倫理的配慮

実習日誌の所有者である学生には、本研究の主旨を説明し、日誌の記録等によるデータ収集の了解を得た。また、研究対象とした実習機関、指導職員、学生については、個人が特定できないよう匿名化してワークシートの作成等を行った。

4. 研究結果

本分析結果では、職員の指導体制が学生の日誌におけるコメント指導に異なる様相を示していたことから、コア・カテゴリーとして、〈役割認識に基づく指導言語の表出〉という概念を産出した。この定義は、「組織の指導体制を反映して形成される職員の実習指導への役割認識が、コメント指導の質や機能を方向付け、言語による指導に表わされること」である。そして、その役割認識の異なる2つの様相からサブ・コアカテゴリーとして、学生の個別性に基づく指導である〈個への着目〉と、担当した時間・場面に限定した指導である〈場の提供への着目〉が生成された。なお、〈個への着目〉サブ・コアカテゴリーは、〈モニタリング指示〉〈引き出し指導〉〈向き合わせ指導〉〈寄り添い〉の4つのカテゴリーによって構成される。学生の視点に着目し、学習能力や実習課題を把握しながら実習プログラムを設定しており、そこで捉えるべき事柄を管理するとともに、日誌による記述によって言語化を促している。その際、学生固有の感じ方、考え方に気付かせるとともに、その表出を肯定的に支持し、最終的にはソーシャルワークの専門的視点に向き合わせるという概念間の循環による一連の指導プロセスをたどる構造が示された。一方、〈場の提供への着目〉サブ・コアカテゴリーは、〈場の解説指導〉〈制約付きの促し〉〈支援スタンスの言語化〉の3つのカテゴリーによって構成される。複数の部署によって実習プログラムが生まれ、担当職員が日々交替する指導体制に多くみられた。その日に提供した実習場面の意味付けや教育的な解説、補足説明が中心となり、概念間のつながりは弱く、学生との断片的な関わりも反映し、職員からの一方向の表出による概念で構成された。

5. 考察

本研究から、実習日誌のコメント指導は、組織における実習指導体制との結びつきが大きいことが示唆された。実習における日誌は、学生にとって体験をとおした学びの道具である。その記述に対するコメント指導は、さらに学生の言語化を促し、学びを強化するスーパービジョンの一環である。そして、実習プログラムの実習に果たす役割は、内容の充実もさることながら、そこでの着眼点や見聞の意義を職員と学生がどこまで共有できたか、そのスーパービジョンの質、内容、方法によって大きく左右される。本分析では、〈個への着目〉による指導において、〈モニタリング指示〉が行われており、このカテゴリーは〈プログラム管理〉〈専門的視点への差し向け〉〈実習課題への差し向け〉の3つの概念で構成されている。このことから、学習効果のある実習プログラムの設定と、継続した関わりによる学生の関心や力量の把握との間に強い関係性があると考えられる。一方、〈場の提供への着目〉による指導では、職員は自分が担当する実習プログラムに着目し責務を果たす役割を担っているものの、その前後の実習内容との継続性や学生の実習課題を考慮したコメント指導はみられなかった。これは、相手の状況を把握せずにスーパービジョンの「教育的機能」が用いられる格好となっており、指導における偏りとして捉えられる。

以上のことから、実習プログラミングの今後の課題としては、養成校は学生の自己課題を明確にできるよう事前指導を徹底し、また実習先の指導職員は、学生の個別性にも着目しながら、いかに内容に関連性をもたせてプログラムを組み継続的なスーパービジョンを行うか、職員間の連携強化が求められると考える。それは単に、社会福祉士新カリキュラム対応のための実習指導体制の整備ではなく、指導を担う職員をも含む組織全体の人材養成の見直しであり、スーパーバイザーとして受けた指導が人を育て、その経験がスーパーバイザーとしての学生や部下の育成に活かされるような、人材養成における循環である。